

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.813 2022

2022年1月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



OPINION

ユースはポストコロナの社会で重要な役割を果たす

2021年国際青少年デーによせた世界6大ユース組織による声明

世界人口の15%である約12億人が、15歳から29歳までの若者です。私たちは世界に向けて、今こそ若者の声を聞くべきです。気候変動、ジェンダー不平等、コロナの影響など、世界最大の課題を解決するためには、若者がその一員として認識される必要があります。

パンデミックによる危機は、グローバル社会の不公平さと脆弱性を浮き彫りにしました。特に若者たちの教育、仕事、人間関係、精神衛生といった課題はパンデミック以前からあったものですが、その犠牲はさらに大きくなりました。

しかし同時に、若者たちには真のチャンスももたらされています。

2020年末、Big6と呼ばれる世界6大ユース組織は、国連とWHOの支援を得て、「Global Youth Mobilization」を実施し、ウイルスの影響やそれに伴う多くの地域社会の課題に対して、若者や彼らのアイデア、革新的な解決策を強調し、推進しました。そこで私たちが見たのは、プラットフォームと主体性、そして世代を超えた支援があれば、若者たちはコミュニティや国を超えて解決策を提供するパートナーになれるということです。若者たちは、心と体の健康に取り組み、教育の中断による影響を緩和し、デジタルスキルのトレーニングを行い、生計の支援と金融リテラシーを通じて雇用機会を改善し、職業訓練とスキルを提供し、ワクチンやその他の感染予防に関する意識を高めています。

各国政府は青少年政策を強化し、そこに資金を投入すべきです。多様な背景を持つ子どもや若者が、政策の開発や意思決定の場面で役割を果たすことを約束すべきです。すべての子どもや若者の健康が守られ、学校の内外で、子どもや若者が教育を受けるためのデジタルアクセスを確保できるよう、投資すべきです。また、将来のキャリアを保証するために、スキルアップと学び直しに取り組みなければなりません。そして、これらすべての取り組みは、女の子や若い女性にこれまで以上に注意を払う必要があります。

そして、私たち市民社会が果たすべき役割は大きい。私たちは、若者にサービスを提供するのではなく、若者たちのアイデアを促進する役割を担っています。私たちはサポーターであり、フォロワーであり、共同制作者となって、若者たちのスペースを提供するのです。若者たちはすでに表彰台に立っています。そこは彼ら・彼女らの留まるべき場所なのです。

アーメド・アルヘンダウィ（スカウト世界連盟）
カルロス・サンビー（世界YMCA同盟）
ケイシー・ハーデン（世界YWCA）

ジョン・メイ（エディンバラ公国際賞財団）
アンナ・セガール（ガールガイド・ガールスカウト世界協会）
ジャガン・チャバガイン（IFRC、国際赤十字・赤新月社連盟）

Change Agent

Youth Empowerment

5 Change Agent

未曾有の世界危機において、YMCAに関わる一人一人がポジティブネットの実現のために地域、世界の課題に臨み、Change Agent (Global Servant) の育成に注力する。

日本全国において都市YMCA、学生YMCAが、それぞれの地域性やこれまでの歩みの上に日々、活動を展開しています。それぞれ多様性・独自性を最大限に活かしながら、日本のYMCAが一致協働して目指す方向性を定めたものが日本YMCA中期計画です。5つの項目からなり、これらを通してブランドビジョンである「ポジティブネットの創造」を、一歩前に進めることができるよう願っています。順次ご紹介していきます。（日本YMCA中期計画2021-2023）

●全国のYMCAのさまざまな活動はこちらからもご覧いただけます。 <https://www.ymcajapan.org/>

ユースのメンタルヘルスとチャレンジ 「楽しさを入りに正しい行動を」

私たちはこの2年、人と人のつながりを絶たれ、特に、成長期であるユース世代には大きな影響を及ぼしています。今回は、YMCAとつながりながらYMCA内外で活動する多様な方々よりお話を伺い、この間の変化とこれからについて語っていただきました。

ユースがコロナ禍でそれぞれ感じた「生きづらさ」に対して、SNSなどを活用して自ら解を求めて動き出しています。そこから「私も社会も良くなっていく」活動が生み出されるヒントは、楽しさや自然体にあるようです。Z世代と言われる彼らの発信は「人が生きる上で大切なもの」を喚起し、多くの人たちの共感を呼んでいます。YMCAは若者の信頼できるパートナーとして、未来を創造していくユースを応援していきます。

コロナ禍での2年間 私たちの生活

最初の「緊急事態宣言」 日常で気づいたこと

中村 保育士として自分が感染しないか、子どもを感染させないかという不安はもちろんありました。それでも一番は、子どもを不安にさせないようにすることです。普段から表情で子どもたちに伝えることがたくさんあって、「マスクをして表情を伝えるにはどうしたらいいか」を保育士同士で話し合うことはよくありました。しかしコロナの日々を過ごすうちに、保育士も子どもたちもお互いに慣れてきて、見えている目の表情で意思疎通ができるようになっていきました。



感染対策をして、暑い夏にはかき氷を楽しんだ（青山さん）

青山 学童は公園に行くことができなくなりずっと部屋の中で過ごす日々でした。最初は、メリハリがなくなるだろうなと思っていました。でもそのとき気づかされたのは、子どもたちは「楽しむ力」を持っているということ。みんな置かれた環境で遊びを見つけていけます。子どもは、大人が思っている以上にたくましくて、いろいろなことを考えていることを知りました。

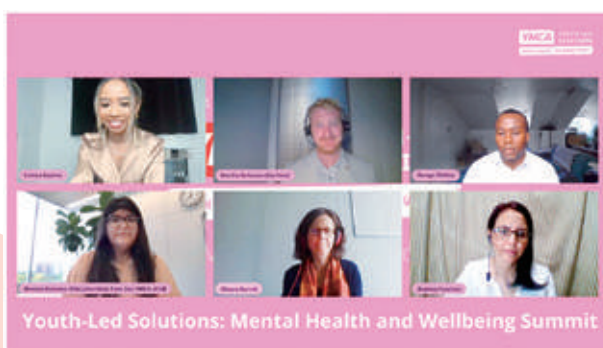
山内 当時私はまだ高校生で、児童養護施設で暮らしていました。学校休校期間は施設から出られないので、小学生の男の子たちがけんかっ早くなった時期もあり、子どもだけではなく職員もストレスがたまっている様子でした。私はアルバイトができ

なくなり、急に時間ができてSNSを始めたんです。そこでいろいろな方とつながって、それが今の活動をはじめのきっかけとなり、コロナに助けられたところもあります。大学進学準備も自分で学費や生活費を工面する必要がありましたが、SNSを通じて奨学金の情報や、申請方法を詳しく教えてくれる人もいました。もちろん、知らない人たちです。

「コロナに助けられた」 SNSとオンラインで人とつながる

北村 僕もそのころまだ高校生で、長野にいました。コロナになって、それまで東京で行われたいろいろなイベントが、オンラインで行われるようになり、長野からでも参加できるようになりました。それまでの狭いコミュニティから世界が一挙に広がりました。僕も「コロナに救われた」、っていう感じはあります。
松永 僕は東京の現役高校生ですが、人と会うことが難しくなり、時間もできたので、Twitterなどで「おもしろいな」と思う発信をしている人に「30分くらいZoomで話しませんか」と思い切ってダイレクトメッセージを送って、新しいつながりを作ったりしていました。学校でもオンラインが使われ始めて、オンラインがスムーズに導入できたのはコロナがあったからだと思います。

鈴木 私は大学のサービスマンとして参加した世界のYMCAの活動から、同じ趣味を持つ人の集まるオンラインプラットフォームの構築を提案しました。オンラインは便利だけれど、環境やツールに左右されることもあり、コミュニケーションを深める難しさを実感しました。メンタルヘルスの課題



世界のユースと交流したオンラインイベント（鈴木さん）



として、人と話すことができなくてダメージを受けている人もいることから、共通の趣味を持った人と好きに話せるプラットフォームがあればと思いました。

社会課題への気づき 私たちのチャレンジ

自分たちで活動を 作り上げていく

山内 昨年、同じ児童養護施設で暮らしている小学生から「本を読みたいから教科書を貸して」と言われました。「なんで教科書？」と思いましたが、その子には学校の教科書さえ貴重な読みものなんだと気づきました。情報を得る機会が本当に少なく、それをSNSで発信したら「本ならあげるよ」とたくさん言ってもらいました。そこで「あなたがこれまで出会った本の中で、最高の1冊を子どもたちへのメッセージと一緒に届けてください」という企画をはじめました。それが「JETBOOK作戦」のきっかけです。本を通じて子どもたちが新しい情報を得たり、メッセージを読んでたくさんの人たちに気にかけてもらっていることを感じてほしい。全国に604カ所ある児童養護施設の子どもたちが、環境

【JETBOOK作戦】

皆さんがこれまで出会った本の中で最高の1冊を、子どもたちへのメッセージと一緒に届けます。届いた本を通じて子どもたちは新しい発見をしたり、メッセージからたくさんの人たちの価値観に触れていきます。本という目に見える形で「その本の数の人が応援してくれているんだよ。自分を気にかけてくれる人がたくさんいるよ。人を頼っていいんだよ」というメッセージが届くことに大きな意味があります。

▶ https://twitter.com/jetbook_



中村 美沙さん

名古屋YMCAかみさわ保育園保育士。コロナ禍で感染への不安を抱えながら子どもたちの日常と安全を守りつづける。学生時代から東日本大震災被災児童の支援活動を続けている。



青山 夏樹さん

茨城YMCAスタッフ。学童保育担当。2022年10月に実施されたアジア・太平洋同盟の主催する研修に参加し、コロナ禍におけるリーダーシップとミッションについて学ぶ。学生YMCAシニア。



山内 ゆなさん

大学1年生。2歳から18歳までを児童養護施設で過ごす。「JETBOOK作戦」プロジェクト代表。社会から情報を得る機会が少ない施設の子どもたちへの機会づくりとして立ち上げたクラウドファンディングの目標は1万人。



北村 優斗さん

大学1年生。株式会社Gabクリエイティブディレクター。人気番組「逃走中」とゴミ拾いを融合した「清走中」を考案。20社を超える企業からの協賛のもと、これまでに600人以上が参加。



松永 幸樹さん

都立 高校3年生。日本YMCA同盟インターン。企業と共に教育のプロジェクト開発を支援したり、高校生が自分たちのキャリアと向き合う機会を提供する。



鈴木 優理さん

大学1年生。サービス・ラーニングとして、世界YMCA同盟主催のYouth-Led Solutions Summitに参加し、ユースのメンタルヘルスについて、世界のユースとの意見交換を体験。

これからの私たち

【チャレンジの10年先】

山内 児童養護施設の子たちは何かを体験する機会や人とつながる機会が少なく、そういう時間を作ることができていません。本を届けることをきっかけに、機会やつながりを作りながら、子どもたちが「自分も何かしたい、できるかもしれない」と感じてほしいです。だから、「身近なロールモデル」を作りたいと思っています。私一人が活動を引っぱるのではなく、後輩がまたその後輩に活動を引き継げるような循環を創りたい。当事者である子どもたちに近い人が支援活動ができるよう育成やサポートをしたいのです。

北村 僕はたくさんの方の興味を選択肢を増やしたいです。おもしろそうとかワクワクするという思いは人生の可能性を広げると思うんです。だから人生の面白さに感動できる人を増やしたい。「清走中」の参加者の好奇心を拡張したいのはもちろんあるけれど、ゴミ拾いを株式会社として一緒にやっている仲間たちに、一番幸せでいてほしいし、楽しく働ける環境を作りたいと思っています。活動にも共感して関わってくれる人が増えて、幸せの輪が広がるために、自分の時間を使いたいです。

松永 僕は、「受動型教育」の課題をなくしたいと活動しています。おもしろくしたいと本気で考えた文化祭の企画が「前例がない」という理由でできなくなって、「毎日授業と部活に動かしなさい、良い大学に行きなさい」という学校に疑問を持ったことがきっかけです。その課題を解決したくて活動をしているので、10年後に同じことをしていたら、今のやり方が何かずれ

【清走中】



清走中は、フジテレビの人気番組「逃走中」と「ゴミ拾い」を融合させた、ゲーム感覚ゴミ拾いイベントです。

清走者の皆さんには、街中のゴミを集めながらLINEで通達されるミッションをクリアして、攻略を目指してもらいます。これまで長野県内で11回開催し、600人を超える清走者の人たちが参加し、300kg以上のゴミを獲得しています。

▶ <https://www.seisouchu.com/>



「なんとなく」から卒業したい高校生のためのイベント 社会課題解決アイデアソン（松永さん）

ているということ。それでも同じことをしているというのでは、自己満足になってしまう。課題が解決すれば、自分たちの役割は終わるので、解散していいんだと思っています。だからそれまで一生懸命やって、10年後はまた、違うことをやっていきたいです。

【ユースがユースをエンパワーする】

鈴木 これまで、自分が恵まれた環境で育っていることのできる支援がある、と考えていました。コロナ以前、エチオピアを訪れたときに出会った子どもたちは、教育を受けられることへの喜びでいっぱいの笑顔をしていて、それを機に開発教育の仕事の興味を持っています。今回、みなさんの意見を聞いて、インクルーシブな視点から身の回りの社会を見ていることにすごく刺激を受けました。

青山 YMCAって人が集まる場所だと思っんです。みなさんの素敵なアイデアを聞いて、YMCAは何ができるんだろうかと考えるとやっぱりユースエンパワーメントが大事になってくるなど思いました。



保育園が子どもたちに安心な場所になるように（中村さん）

中村 私はみなさんより少し年上ですが、学生時代から続ける東日本大震災で被災した、福島の子どもの支援活動を始めたきっかけは、「子どもが好きだから」でした。今までの活動を振り返っても、子どもが好きという気持ちがいつも私の真ん中にある。それがYMCAでの保育士という仕事にもつながっています。これからも子どもたちが元気に、楽しく過ごせる毎日をサポートしたいです。

「Negative capability × X = Positive well-being」

第52回全国YMCAリーダー研修会報告

第52回全国YMCAリーダー研修会は「Negative capability × X=Positive well-being」をテーマとしました。そもそもPositiveとはなにか？そもそもNegativeとはどういう状況なのか？Positive well-beingを実感するには何が必要なのか。



Negative capabilityに注目し、SDGsの考え方である『誰ひとり取り残さない』という願いにつなげていく機会にしたいと準備を進めてきました。

今年は10月17日から11月28日と約1ヵ月半をかけての開催となりました。このうち3日間をインプットの時間として、期間中、参加者はグループでオンライン上で集い、ディスカッションを繰り返し、テーマの中にある「X」を求めていきました。

1日目には若松英輔先生から「答えなき問いを生きる」というテーマで講演していただきました。「ピクトール・フランクルーそれでも人生にイエスと言う（春秋社）」を読み解きながらこの世界が目を背けてきた事実や、人間の価値、尊厳、義務、スピリット、生きる意味などについてお話をうかがいました。終了後の参加者の第一声はみな「ムズかしかった」。「ムズかしかった」には否定的な意味も含まれますが、参加者の多くは、この言葉の奥に複雑に物事が絡み合うこの社会の中で人生を全うする上でのたくさんの問いと出会えたように感じています。

3日目の各グループの発表ではさまざまなXが求められました。リーダーたちはXをグループの仲間と存分に語り合い、たくさん悩み、たくさんつまづいた過程と共に発表していました。

Negative capability×X=Positive well-beingの答えは誰も持っていません。なぜなら「Positive well-being」は新しくYMCAが作った言葉だからです。だからこそユースと一緒に考えることができ、事務局を含むユースがじっくり悩み考える機会となったと思います。

これからの時代を担うリーダーたちの未来が、この研修会の評価につながると思います。

オンラインではありましたが、この研修会での多くの出会いや気づきが灯となり、今後の参加者の生涯を照らすあかりとなれば幸いです。

とちぎYMCA 濱塚 牧人

(第52回全国YMCAリーダー研修会/主管：とちぎYMCA)

アジア・世界のYMCAから

香港の少数民族コミュニティを支援 香港YMCA

構造的な人種差別に加え、パンデミックにより大きなダメージを受けている少数民族の家庭では、多くの青少年が学習の機会を失っています。香港YMCAでは学校のオンライン授業に苦戦している学生に対する個人指導や、インターネットにアクセスできない少数民族の学生のためにYMCAのセンターで、インターンが指導する無料の対面式チューターセッションを実施しています。



自分の体、心、精神を大切にする マニラダウンタウンYMCA

マニラダウンタウンYMCAはメンタルヘルスキャンペーンとして、メンタルヘルスに関する講演や討論、トレーニングを通じてユースリーダーと学び、力づけることを目的とした1ヵ月間のイベントを開催しました。穏やかなヨガやマインドフルネスの概念、自分自身の心の健康に気を配ること、他者との関係のなかでどう心の健康のバランスを取るか、など期間中はさまざまな学びの機会が提供されています。



#YSユースアクション

Y's×SDGs Youth Action2022 アクションプラン募集中!

YMCAとワイズメンズクラブが、SDGsの定める地域課題解決に向けたユースの活動に助成金(上限20万円)を提供いたします。このような活動をやってみたいという若者たちのグループを広く募集しています。審査のうえで、選ばれたユースグループが実施する活動に対して、その地域のスタッフが伴走します。共に地域の課題解決に向けて活動しましょう。YMCAとワイズメンズクラブが協働して取り組む事業です。



Y's×SDGs Youth Action 2022

(主催：ワイズ・YMCAパートナーシップ検討委員会)

●概要：ユース世代のチーム(高校生～35歳の3名以上)がSDGsの視点から各地域の社会課題解決に向けた活動をYMCAとワイズメンズクラブが支援する事業

●応募期間：2021年11月20日～2022年2月10日

＊応募期間終了後、企画プレゼンテーションを実施、書類及びプレゼンテーションの内容にて選考

●活動期間：2022年4月～2023年1月(約10ヵ月間)

●選考チーム数：最大10チーム

●支援額(活動資金)：最大20万円/1チーム

サイトから応募書類をダウンロードできます

<https://sites.google.com/japanymca.org/youth-action2022>

日本YMCA中期計画を語ろう!

みんなが 5.Change Agent チェンジ エージェント

Change Agentというのは、変化の必要を感じる人。変化のために動き出す人。そして変化を求める人たちを応援する人、これがChange Agentだと私は考えています。

コロナ禍による未曾有の世界危機において、これまでの社会課題がより浮き彫りになっています。続くパンデミックの中で、人類にとって大きな課題である気候変動、地球温暖化の問題があります。そして地球規模の課題だけでなく、多くの課題が地域の中にもあり待ったなしの状況がいくつもあります。

YMCAに関わる一人ひとは、ポジティブネットの実現のために地域、世界の課題に望み、YMCAが担う働きは何か？どう作るか？を考えてほしいのです。その一人ひとりの考えとその行動がうねりとなって、YMCAの新しい働き方、働き場、働き方向になっていると信じています。

未来社会を想像しながら変化を起こし変化を起こすことに挑戦しましょう。変化はより良い社会づくりのチャンスを生みます。

いまここで、課題に対応していくためには変化が必要です。変化を求める人、変化しようとする人をサポートする人は、若い人であっても、年を取っていても、みんながチェンジ・エージェントになる、これが大切なポイントになります。

山田 公平

